

〈私〉をどう理解するか

—H. ワロンの〈内なる他者〉を手掛りに—

教育哲学・教育史研究室 西 平 直

Understanding 〈Moi〉 Through H. Wallon's Idea of 〈L'autre Intime〉

Tadashi NISHIHIRA

If we consider 〈moi〉 as substance, that is, as self-conclusively, self-contained and self-identically without others, it is impossible to explain how 〈moi〉 enters into relation with others and how 〈moi〉 will be able to change.

But if we do not regard 〈moi〉 as substance, how should we regard it? I propose to examine 〈moi〉 using H. Wallon's idea of 〈l'autre intime〉 (the other inside one's self) as focal point. The relation between 〈moi〉 and 〈l'autre intime〉 should enable us to understand the structure of the 〈moi〉. This internal relationship between 〈moi〉 and 〈l'autre intime〉 means that 〈moi〉 is not independent but possesses a differentiations inside.

So this paper proposes that 〈moi〉 is not substance but it is itself relation. If we can think of the being-structure of 〈moi〉 in this way, we should be able to understand how 〈moi〉 enters into relationship with others and we can understand 〈moi〉 as process. This paper takes a first step in explaining how an understanding of 〈moi〉 as relation resolves the two issues of relationship with others and change in the self.

前稿における¹⁾〈自己〉の考察は、自己を他者との関係なしに独立した存在として捉える限り、「今の自分を乗り越える」とか「いろいろな自分を生きる」といった思春期に特有のあがきが、理論的に説明されえないという帰結に至りつた。つまり、〈私〉ということ、自分の身の内側のどこかに潜む、固定的・静止的な秘奥の核のように考え、それを〈自己完結的、自己同一的な確固たる実体〉として出発点に据える限り、〈思春期における自己の解体と再編成のプロセス〉、即ち今の自分を一度解体させながら、新しい自分をたて直し、新しい他人関係を作り直してゆくという内面のドラマが理論的に説明できなくなるという結論を得た。

では、このように〈私〉を実体として捉えてはならないとするならば、一体〈私〉は、どのように理解されればよいのであろうか。

結論を先取りする形で課題を示しておくならば、重要なのは次の二点である。

まず、〈私〉は、他者なしには存在しえないということ。即ち、他者をすべて排除し尽し終えた最後の残りに、純粹な〈私〉が確保されるというのではなくて、その純粹な

〈私〉すら、他者との関係の中でしか成り立たない、ということである。〈私〉は、自己完結的に存在するのではなくて、そもそも、他者との関係においてしか存在しないということなのである。

さらに第二に、その〈私〉は、常に、変容や発達のただ中に身をさらしつつあるということ。言い換えれば、常に今の自分を乗り越えようとして続けているということである。その意味では、〈私〉は、自己同一的・静止的に存在するのではなくて、そもそも、プロセスとしてしか存在しない、ということなのである。

このように、〈私〉を〈関係において〉、また〈プロセスとして〉理解することを、あらかじめ課題として固定した上で、本稿はその課題を理論的に整理し直す作業を進めてゆこうとするものである²⁾。

その作業の場として、本稿は、前稿からの課題でもあったH. ワロンの〈内なる他者 (l'autre intime)〉という言葉に注目する³⁾。そして、この〈内なる他者〉と〈私 (Moi)〉との関係に焦点をしばりながら、〈私〉を、〈関係において、プロセスとして〉理解してゆこうとするのである。

従って、本稿は、一方から見れば、ワロンが〈内なる他者〉について論じた二本の論文⁴⁾を、その二本にのみ限定しながら⁵⁾注釈してゆく作業であると共に、他方では、〈実体として固定された私〉理解から自由になるために、その作業の場としてワロンの術語をお借りした、ということにもなるわけである。

ところで、作業を進める前に、〈私〉というこなれぬ言葉について一言釈明しておこう。本稿は、ワロンのいうMoiを、すべて〈私〉という語に置き換えている。ワロン発掘を進めておられる浜田寿美男氏らが、Moiを、「自我」ないし、「自分」と訳しておられることを思えば、統一をはかるべきでもあったが、あえて〈自我〉とはしなかった。それは、第一に「自我がある」という表現と「実体的」理解との結びつきを警戒したためであり、第二に、問題の焦点を、心的装置としての〈自我〉の分析ではなく、日常的に語られる「僕」や「わたし」の分析につなげてゆきたいと願うためでもあった⁶⁾。

従って、Moiを〈私〉と置き換えること自体、既にひとつの読み込みであって、それがワロン理解として正確かどうか、また、日本語の文章として適切なかどうか、さらには〈私〉という日常語のもつ曖昧さによって、問題の本質が曇らされていないかどうか、等々、あらためて問い直す必要のある用語法であることを自戒した上で、〈私〉で統一しながら話を進めてゆくことにしようと思う。

第一節 〈私〉と〈内なる他者〉

さて、それではワロンの論文を検討する作業に取り掛ろう。

先にあげた二本の論文は、執筆時期も10年の隔たりをもって書かれたものであり、とりわけ、'56年論文は、'46年論文への批判に答えるべくして書かれたものである、との指摘⁷⁾に従うならば、両者の議論枠組は、本来区別しながら扱われるべきであろう。しかし、本稿は両者の相違を強調するよりも、むしろ、両者をひとつのテーマをめぐって補足し合う関係にあるものとして理解する。むしろ、そのテーマこそ〈内なる他者〉である。

では一体、この〈内なる他者〉は、はじめどのような出来事の中で語られたのであろうか。まず、'46年論文において語られている一つの暗喩に目をとめてみよう。

ワロンは、そこにおいて「意識の最初の状態」を「星雲のようなもの (une nébuleuse)」と表現する。その「星雲」においては、「外発的・内発的な様々の感覚運動的活動が、はっきりとした境界なしに漠然と拡がっている。」ところが、「やがて、その拡がりの中に、ひとつの

擬縮の核、即ち私 (le moi) が形をとってくる。しかし、それだけではなく、[その核のまわりに]もうひとつの衛星もできてくる。即ち、下位の私 (le sous-moi)、つまり他者 (l'autre) である。」('46 p. 283, 64-65頁)

このだけの暗喩である。しかし、ザゾも指摘するように、ワロンが暗喩に頼るのは稀なことであるから、あえて頼らざるをえなかったこの暗喩には、逆に、ワロン自身にも十分説明し尽せないイメージが、そのままの形で表現されていると考えられるのである⁸⁾。

まず、星雲にたとえられた意識の最初の状態がある。ワロンは「意識が最初から本質的に個人的であるとする伝統的な考え方」('46 p. 279 53頁) に対して繰返し批判を続け、そこから出発する限り、幼児の意識を正確に理解しえないことを強調する。「心的進化の初期の状態は、伝統的に考えられてきたのとはむしろ逆に、外的状態に属するものと、主体それ自身 (sujet lui-même) に属するものとが、互いに区別されないまま、[混沌としている] 状態であったようである。」('46 p. 282 60頁) つまり、そこでは、〈私〉も〈他者〉も、同じ漠然とした未分化な拡がりの中に溶け込んだままでおり、そもそも〈私〉ということが、まだ成り立っていないということなのである。

ところが、そこにひとつの分割が生じてくる。先の暗喩に従うならば、〈ひとつの擬縮の核〉と、その核のまわりにできる〈もうひとつの衛星〉との分割が生じてくる。その二つの項は、別の箇所では次のようにも表現されている。「ひとつの項は、自分との同一性 (identité avec soi-même) の確立であり、もうひとつの項は、この同一性を保持するためにそこから排除せざるをえなかったものの縮約である。」('46 p. 284. 66頁)

ここで重要なのは、〈私〉の成立という出来事が、〈もうひとつの項〉の成立と、常にセットになって語られている点である。言い換えれば、〈私〉の成立というその場面は、〈もうひとつの項〉の成立なしには語られないのである。

実は、こうした〈私〉と対をなす〈もうひとつの項〉こそ、本稿がいうところの〈内なる他者〉である。

確かに、ワロン自身はこの〈もうひとつの項〉を、十分な規定も加えぬままに様々に言い換えている。即ち、「他者 (l'autre)」とも、「社会的自己 (socius)」⁹⁾とも、また、「第2の私 (l'alter)」とも、「第2の自我 (L'Alter Ego)」とも言い換え、しかも、これらの術語の間に微妙なニュアンスの違いを含ませている。さらには、二本の論文の間に、その用語法の食い違いさえ見せたりするのであるが、ワロン自身が十分な規定を与えていない以上、それらを厳密に規定し区別することは不可

能であり、また本稿の展開には不必要でもある。むしろ本稿は、それらの違いには一際拘らず、〈私〉と対をなす〈もうひとつの項〉を、〈内なる他者〉という術語で統一する。従って、本稿のいう〈内なる他者〉は、様々な言い換えに対して、それらを内に含んだ上位概念として規定されているということになるわけである。

さて、〈内なる他者〉をこのように固定した上であらためて先に語られていた場面を、具体的な出来事として見直してみよう。一体、先の出来事は、幼児と周囲の人々との関係において生じたことなのであろうか、それとも、幼児の意識の内部の出来事なのであろうか、それとも、その両方なのであろうか。そこで、事態を記述してゆく視点ということ¹⁰⁾を考慮に入れながら、もう一度検討し直すことにしよう。

まず、幼児を観察する者の視点、即ち、幼児とその状況とを、同時に観察し記述する立場から考え直そう。幼児は、自分と「周囲の人々 (Les personnes de l'entourage)」を混同したままに、あたかもすべてが〈自分のもの〉であるかのようにふるまっている。それを、ワロンは次のようにたくみに表現する。「子どもは周囲の状況と一体となっているために、そばの人がいなくなっただけで、自分の一部が失なわれたと感じているように見える。」(’56 p. 88. 26 頁)つまり、自分も他者も、すべて〈情緒的共生 (symbiose affective)〉の中に塗り込められており、しかも、そのすべてが〈主観的愈合 (syncretisme subjectif)〉という仕方で、〈自分に属するもの〉であるかのように感じているのである。

しかし、やがて幼児も〈自分ではないもの〉に気づくようになる。つまり、周囲の人々と自分とが、別々の個体であることに気づくようになる。’56年論文は、そうした経緯を次のように述べている。「とにかく、他の人々 (d'autrui) が、こうした堅固な不動性を持っているからこそ、子どもは自分のなかに内なる他者 (un Autre interieur) を見出してゆくのである。」(’56 p. 92. 38 頁)つまり、この立場から見ると、〈周囲の人々〉の方が、〈内なる他者〉に対して先行するということになるわけである。

ところが、幼児本人の目にはそうは映らない。幼児本人が体験しているがままを、幼児の立場になりかわって記述するならば、先の出来事は全く別様に記述されることになる。

まず、最初の状態において、幼児自身は、「外発的・内発的な様々の感覚運動的活動」の中にいる。つまり、ここではそもそも幼児本人の視点ということそれ自体が成り立たない。むしろ、視点がないままに、漠然とした未分化な一体感、即ち「主観的愈合」の中に休らいている。

ところが、そのうちに〈自分の〉予想や期待に反した事態に出くわすことになる。その時幼児は、ワロンによれば、「ただズレ (désaccord) や驚きや不安の感情」を、情緒的に体験する。(’56 p. 88. 27 頁)しかし、正確には、はじめはその〈自分〉ということこそが、成り立っていないわけであるから、なによりもまずはじめに感じられるのは「ズレや驚きや不安」の感情ということになる。そして、そのズレにおいて、逆に、〈自分〉が意識されてくる。幼児の体験に似合わぬ言葉を使うならば、〈私〉の自覚が生じ、〈私〉の視点が生まれてくる。そして同時に、ズレの向う側に、〈私ならざるもの〉を自覚することにもなる。

従って、幼児本人の視点からみるならば、〈周囲の人々〉がまず先行して現われるわけでは決してない。幼児にとっては、〈周囲の人々〉は、ズレ以前には存在していないのであって、まず始めに、ズレがあり、そこから逆に〈私〉と〈私ならざる他者〉とが生じてくるのである。そのことを、’46年論文は、次のように表現している。「この区別〔私と内なる他者との区別〕は、主体 (le sujet) が実在する人々との間に結んできた習慣的關係をただ抽象的に写しとったものではない。その区別は〔主体〕のもっと内面で行なわれる二項分割の結果なのである。」(’46 p. 284. 66 頁)ここに言われる「〔主体の〕もっと内面で行なわれる二項分割 (une bipartition plus intime entre deux termes)」こそ、具体的には、幼児が体験するズレ、即ち、未分化な一体感のうちで最初に体験されるズレとして理解されるのである。

従って、幼児本人の視点からみる時には、先の観察者の視点から記述された説明とは全く逆に、〈内なる他者〉の方が先行することになってしまうわけである。

では、どうしたらよいか。そこで、第三に今度は、幼児の体験を、単に記述するだけでなく、実はそこで何が起っていたのかを、あらためて分析的に検討する視点に立とう。

幼児の体験するズレは、〈私〉と〈周囲の人々〉との分離成立につながるものであった。しかし、そのズレは、実はもともと、幼児と周囲の人々との間で生じた食い違いに起因していた。そこで、両者を踏まえながら分析的に検討し直すならば、〈私〉と〈内なる他者〉との分離は、〈私〉と〈周囲の人々〉との分離と、正確に重なることになる。しかし、それは〈内なる他者〉と〈周囲の人々〉とが同じものであることは意味しない。そうではなくて、〈私と内なる他者〉とのあいだの關係と〈私と周囲の人々〉とのあいだの關係との二つの關係が互いに重なり合い、同じ事態の中で相即し合っている、ということである。¹¹⁾

先に、星雲の分割にたとえられていた出来事は、分析的に解明される時、こうした二つの関係が相即して成立してくることとして、説明されることになるのである。

〈内なる他者〉と〈周田の人々〉とを、以上のように整理した上で、あらためて問い直そう。一体、〈内なる他者〉とは何なのであろうか。より正確には、ワロンは〈内なる他者〉という言葉を使うことによって、何を語ろうとしたのであろうか。

その基本的なイメージは、見てきたとおり〈私〉の成立に際し、その対をなすもうひとつの項であった。そして、さしあたりそれは、意識の外に実在するという意味での〈周田の人々〉ではないとされながら、しかし実は、〈私と内なる他者〉との関係と〈私と周田の人々〉との関係とが、同じ事態の中で相即し合って理解されていることが明らかになってきた。

では一体、この〈内なる他者〉とは何なのか。それは、意識の外に実在するのではない他者として、意識の内にある〈心的表象〉、もしくは、外在する人々についての〈記憶像〉なのであろうか。

ところが、ワロンは、この〈内なる他者〉の存在を強調するためにソクラテスのダイモンや、二重人格・心的自動症の例をあげる際にも、それが、〈心的表象〉であるとか、〈記憶像〉であるとかは語らない。不思議なことに、そもそもそれが何であるか、という説明はみあたらないのである。むしろ、そこでワロンが強調しているのは、「二重性の感情(le sentiment de dualité)」、「心的二重化(dédoublement psychique)」が存在する、ということなのである。(’46 p. 110. 67-68頁)

同様に、この〈内なる他者〉が持つ機能についても、「他の人たちに対置された私が、秘かに立てた欠くべからざる媒介者(l'intermédiaire)であり、代弁者(Le truchement)」(’46 p. 111 72頁)などと比喩的に述べられているだけである。もし〈内なる他者〉が、〈心的表象〉や〈記憶像〉であるならば、その機能についてより詳細な説明が加えられるべきではなからうか。

こうした点から見る時、実は、ワロンにとって、この〈内なる他者〉が何であり、いかなる機能を持つか、という問いは、二次的な関心事にすぎなかったのではないかと、という疑いが生じてくる。では、何が本質的だったのか。それこそ、〈内なる関係がある〉というそのことなのではあるまいか。言いかえれば、〈何と何が関係をなすか〉が問題なのではなく、むしろ〈関係がある〉ということの方こそ、重要だったのではあるまいか。つまり、ワロンが、「人の心的生活においては、社会的自己つまり他者が、常に、私と対をなしている(un partenaire perpétuel du

moi)。(’46 p. 284. 67頁)と定義めいた表現をする時も、この〈社会的自己〉や〈他者〉の内容が重要なのではなく、むしろ、〈私は、対なしには在りえない〉ということの方をこそ強調して読むべきなのではあるまいか。

そう考えれば、ワロンが「二重性」ということを強調していた意味も見えてくる。〈私〉は、常に〈対〉をなし、〈二重性〉の構造を持っている、ということこそ強調されるべき点だったのである。

このように、ワロンにとって本質的に重要であったのは、〈内なる他者〉とは何であるか、という問いではなくて、むしろ、〈私そのものの内に関係があること〉、つまり、〈周田の人々〉とのあいだの対他者関係とは区別された、〈私〉の内なる関係をこそ浮きだたせることであった。そしてそれをワロンは、〈内なる他者〉という説明概念を用いることによって表現しようとしたのである。ところがこうした説明概念を用いることによって、逆に本質的な問題がぼやけてしまうことになり、あたかも〈内なる他者〉という何ものかを解明することが究極の課題であるかのように見えてしまっていたと思われるのである。

第二節 〈私それ自身が関係である〉

さて、以上にみてきたように、ワロンにとって〈内なる他者とは何か〉が本質的な問いではなかったとするならば、もう一步先に考えを進めよう。

この〈内なる他者〉という言葉は、心的表象や記憶像のような、何らかの実体を表現しているのではなくて、むしろ、〈私の内に関係がある〉ということ、言いかえれば、〈私の二重性〉という在り方を表現するための言葉であった。そうだとすれば、この〈内なる他者〉という語は、それを裏から固定する指示対象を何ら持つ必要がなく、はじめから、ただ〈二重性〉ということを表現するために、「第二の項」として想定されていただけということになる。そうであればこそ、ワロンは、この〈内なる他者〉を多様に言い換え、一義的な規定を与えずに残しておくことができたのではないかと、と思われるのである。

しかし、重要なのはこの先である。

もし〈内なる他者〉が、何らの実体ではなかったとしたら、その対をなす〈私〉の方も、実は、何ら実体としては指定されえないのではなからうか。つまり、〈私〉の方も、自分ひとりで自己完結的・自己同一的に存在する実体としては考えられないのではあるまいか。

では、実体でないとしたら、一体〈私〉はどう在るのか。その在り方こそ、〈対〉であり〈二重性〉、つまり、〈私そのものが二重化している〉ということなのではあるま

いか。

しかしそれは、決して、私が二つある、ということではない。そうではなくて、むしろ、それと対比的に表現するならば、ひとつの私が二重化している、ということなのである。言い換えれば、〈私〉は、それ自体とすぎ間なく重なり合う仕方で存在しているのではなく、〈私〉それ自身の内にすぎ間が空き、ズレがある、ということなのである。

ここでひとまずまとめておこう。ここまでの考察は、二段構えの帰結に至りついたことになる。

第一に、〈私〉と〈内なる他者〉との関係は、二つの実体がとり結ぶ関係を意味するのではなく、実は、〈内なる他者〉とは、二重性ということを表わすための説明概念にすぎない、という点である。

その上で第二に、そもそもこの〈私〉それ自身の在り方について、〈私〉は実体として自己完結的に存在しているのではなくて、むしろ、〈私それ自身が内にズレを含んで対をなしている〉という点である。言い換えれば、〈私〉の内に〈私〉と〈内なる他者〉との内なる関係があり、対がある、つまり、〈私〉とは、〈私〉と〈内なる他者〉との関係そのもの、対そのものなのであって、決して、対の片方だけを担う実体ではない、ということになるのである¹²⁾。

このように〈私〉と〈内なる他者〉とを理解した上で、あらためて、ワロンの論文を思いおこしてみよう。〈私の内なる関係〉という理解から、ワロンの論述はどのように読み直すことができるのであろうか。

まず、具体的な場面で考えよう。

ワロンは、〈私〉の成り立ってゆくプロセスの一場面として、叩いたり叩かれたり、逃げたり逃げられたりという「交替やりとり遊び (jeux d'alternance)」を重視して、たびたび話題にのせながら、次のように述べている。

「こうした遊びの中で、子どもは最後に相手の人格、即ち他者の人格を発見する。つまり、役割を交互に演じることによって、それまで未分化であった自分自身の感受性の内部に (dans sa propre sensibilité)、他者性 (l'alterité) を認識してゆく。」('56 p. 88 27頁)

既に、ワロン論文集の訳者浜田寿美男氏もその解説において注意をうながしているように¹³⁾、ここで重要なのは、他者性が「自分自身の感受性の内部に」認識されるのであって、自分自身の外に、全く別のものとして認識されるのではないという点である。子どもは、叩いたり叩かれたりという行為における実際のやりとり関係を自分の感受性の内部に取り込むようになり、その結果、今度は一人会話のように、実際の相手なしに自分ひとりで二役を演じることができるようになるというのである。

つまり、叩いたり叩かれたりという実際の他者との関係とは別に、自らの内にひとつの関係が成り立つというわけである。

この一人二役の行動は、三歳近くになって〈私〉が確立しはじめる頃から、次第に見られなくなってゆくのであるが、ワロンによれば、その相手は完全に消滅してしまうのではない。むしろ、「潜在的なかたちで、あるいは二次的な役割を担って生きつづけている。」('46 p. 285, 68頁) 当然、この相手役こそが常に〈私〉と対をなし続けている〈内なる他者〉なのである。

ではこの時、この〈内なる他者〉はどこにあるのであろうか。先の引用からみれば、それは「自分自身の感受性の内部に」あると考えられる。また、別の箇所、「私と他者とは意識によって同時に形成される。」('56 p. 90 31頁) などという表現を見る時、それは、「意識の内」にあるかのようなのである。

しかし、ワロンは本当に〈私〉と〈内なる他者〉とが「意識」の中に、もしくは「自分自身の感受性」の中にあると考えていたのであろうか。そのように問い直してみると、あれほど〈内なる他者〉は常に〈私〉と対をなす、と繰り返し強調されていたにもかかわらず、何の内でも対をなしているのかという点については明確な規定をみつけることができないのである。

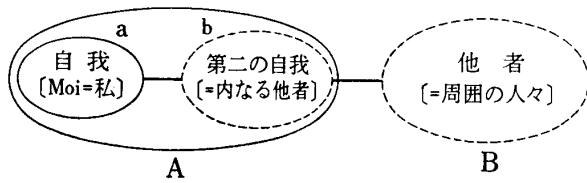
むしろ、強いて挙げるとするならば、「第2の自我[即ち内なる他者]」はときには、「機能的なもの (fonctionnel)」として心の内側に残っていたり、ときには、「外的実在性を与えられて (doué d'existence externe) 現実の人物に体现してあらわれたりする('56 p. 93 39頁) という仕方で、ひとつの働きであり作用として考えられている。つまり、〈内なる他者〉は、〈私〉の外に実体としてあるというよりも、むしろ〈私〉への作用として考えられていることになる。しかも、その作用は、〈私〉の外側から来るのではなくて、まさに〈私〉の内側から、〈私〉との関係において生じてくる。つまり、〈内なる他者〉の様々な作用とは、実は、〈私〉の内なる作用であったことになるわけである。

さらに、実はこの〈私〉すら実体として固定されているのではないから、まさに、この〈内なる他者〉との関係の中でこそ〈私〉も成り立っていると考えざるをえなくなる。従って、〈私〉と〈内なる他者〉との対は、〈私〉の内にあり、〈私〉は、〈私〉と〈内なる他者〉との関係そのものであると、表現されるということなのである。

同じ読み直しを、別の場面で試みよう。

浜田氏は、先にも挙げた解説において、「誤解をおそれず、あえて図式化すれば、」とことわりながら、次のよう

な図を提示しておられる。



そして、「日常意識のなかでは自他関係は A-B として意識されているが、実際には A-B は a-b として縮約内化して、その bこそが A, B, の媒介項をなしている、というように考えれば、比較的分かりやすいのではないかと思います。」と述べておられる¹⁴⁾。

では、こうした一見明瞭な図に対して、浜田氏は、なぜ「誤解をおそれず」と但し書きを加えられたのであろうか。実は、その恐れる誤解こそ、〈私〉や〈内なる他者〉を実体として理解してしまうことではなかったか。つまり、この図は、実体と実体との関係を表わしているのではなく、〈内〉に〈私〉を含んでいるという〈私〉の在り方を示すための苦肉の策であったのではないかとと思われるのである。

しかし、このように理解した上で、問題はこの図における〈私〉の位置である。図において、〈私〉は、小さい a とのみ規定されているのであるが、それでは一体、大きい A の方は何なのであろうか。実は、a のみを〈私〉とし、A の方を見すごしてしまったのでは片手落ちではあるまいか¹⁵⁾。むしろ、この図に即する限り、A も a も共に〈私〉とすべきであって、この A の方こそ、対をなして存在する〈私〉の在り方を示している、と考えるべきではあるまいか。

このように、大きい A も小さい a も共に〈私〉と理解するならば、この図は、〈私〉(A) の内に、私 (a) と内なる他者 (b) とがあるということ、つまり、〈私〉(A) が、内に〈私〉を含んで対をなしているという込み入った事態を説明する図として読み直すことができる。

確かに、〈私〉と〈内なる他者〉とを、共に実体として措定する前提に立つかぎり、こうした理解は完全な論理的な不整合である。しかし、一端その前提をとりさげるとこの図を見るならば、それは、〈私〉自身自身が内に〈私〉を含んで対をなしているという〈私〉の在り方を、かなりたくみに表現したものであると思われるのである。

さて、このように理解した上で、もう一步先に進もう。今、図において、大きい A こそ〈私〉の在り方を示しているのではないかと提案したわけであるが、それではその A を〈私〉として理解してよいのであろうか。

もしよいとするならば、〈対をなす私〉はふたたび動き

のない同一性に閉じ込められてしまい、あらためて実体として理解されてしまうことになる。そして、仮にそれを避けるとすれば、そうした〈対をなす私〉とさらに対をなすもう一つの項が必要になり、その上で、もう一段上の〈対としての私〉が作りだされねばならなくなる。こうなるとまさに「悪しき無限後退の背理」である¹⁶⁾。

実は、この地点で図式化の限界がはっきりあらわれる。図式では、どうしても実体としての理解に陥め取られてしまい、実体ではない〈私〉の在り方は表現しきれないのである。

では、〈私〉と〈内なる他者〉との対を内に含んだ〈私〉とは、どのようにイメージされればよいのであろうか。

そのイメージを作り出すために、ここで独自の自己論を展開しておられる木村敏氏の指摘を援用しよう。木村氏は、自己を、自己自身との関係、または自己自身との差異であると理解しながら、「自己の内的差異」を、二つの異なった自己のあいだの対等な関係と理解してはならないという。そして、G・ドゥルーズの差異理解から示唆を受けつつ、「自己の内的差異」を、次のような「全く不平等で非対称的な差異関係」として述べておられる。

「二つの項のあいだに差異があるのではなく、この差異をになっているあいだは一方の側にもみ内在している。それは、あいだをはさむ両項の差異ではなくて、あいだであるものと、あいだでないものとの差異、差異それ自身であるものと、そうでないものとの差異である。」¹⁷⁾(傍点は原文)

これは、理解しにくい、興味深い指摘である。本稿の言葉で理解し直すならば、次のようなことを意味しているのだからである。

〈私〉がその内に関係を持ち、〈私〉が関係そのものである、といったとしても、その関係は、実は、〈私〉と〈内なる他者〉とのあいだにあるのではなかった、ということである。そうではなくて、〈私〉と〈内なる他者〉との差異は、一方的に〈私〉にのみ含まれており、言い換えれば、〈私〉の方が、それ自体差異であり、差異を不断に産出しつつける差異化のプロセスであるのに対して、〈内なる他者〉の方は、そうしたプロセスの中で、そのつど析出されてくるだけ、ということになるのである。さらに別の表現をとるならば、〈私〉が一方的に〈内なる他者〉を自分自身から区別するのであって、〈内なる他者〉の方が〈私〉を区別するのではないということ、あくまでも、〈私〉の方が区別する主体であって、〈内なる他者〉は区別される客体ということなのである¹⁸⁾。

そして、〈私〉と〈内なる他者〉とのあいだが、〈私〉の方にしか属さないものであるからこそ、その関係全体が〈私〉

の場でなされている、ということになる。つまり、〈私〉と〈内なる他者〉とは、〈私〉の内にある、ということであり、〈私それ自身が関係である〉ということなのである。

以上のように、〈私〉を実体として理解する前提をとり去げてワロンを読み直すならば¹⁹⁾、そこで提示されている〈私〉は、その内に〈私〉と〈内なる他者〉との内なる関係を含むという仕方で、言い換えれば、〈私それ自身が関係である〉という仕方で理解されるべきことが示されたのである²⁰⁾。

第三節 〈関係において・プロセスとして〉

さて以上の考察をふり返ろう。

まず、〈私〉は実体ではない、ということが繰り返し強調されてきた。それは〈私〉が、〈自分ひとりで自己完結的に、自己同一的に自分自身として成り立つことはできない〉ということであり、言い換えれば、〈私〉は他者なしには存在しない、ということであった。

ところが、その他者は、ワロンの論文をくぐることによって、単に主体の外側に実在する人々、いわば〈外なる他者〉を意味するだけではなく、〈内なる他者〉でもあることが示された。つまり、〈私〉は、他者とのあいだの対他者関係と、〈私〉それ自身の内にある内なる関係という、二つの関係において成り立っていた。

その〈内なる関係〉を、本稿はさらに、実体と実体との関係ではなく、〈内にズレを含んで対をなしている〉という〈私〉の在り方として理解し、さらに、そのズレを全く非対称的で不平等な関係として〈私〉の方にのみ内在すると理解することによって、〈私それ自身が関係である〉と言い換えてきたのである。

では、なぜ〈私〉と〈内なる他者〉との関係を、わざわざ〈私それ自身が関係である〉とまで、言い換えてこなくてはならなかったのか。

ここで、本稿の出発点をあらためて思い起こそう。本稿の課題は、〈実体としての私〉理解から解放されるために、〈私〉を、〈関係において〉理解すると共に、〈私〉を〈プロセスとして〉理解することでもあった。〈私それ自身が関係である〉と言い換えて来たのは、〈私〉を〈関係において〉と同時に〈プロセスとして〉理解するためだったのである。

〈私〉がプロセスであるとは、〈私〉が静止的・固定的な自己同一の実体ではないということ、むしろ、常に今の自分を乗り越えようとしつづけている、ということである。しかもそれは、時々〈私〉が重い腰をあげて立ちあがるというような仕方でなく、常に既に、〈私〉は今

の自分を乗り越え続けるという在り方をしている、ということである。言い換えれば、〈私〉は来るべき〈私〉を投企しつづけるのであり、常に可能性として存在しているということである²¹⁾。

では、〈私〉がこのように可能性で在り続けるためには、〈私〉はどういう在り方をしていなくてはならないか。

それは、〈私〉が、自分自身とすき間なく重なり合うという仕方でなく、〈私〉それ自身の中にすき間があり、ズレがあるのでなくてはならない。比喩的に表現するならば、今までの〈私〉とそうした自分を乗り越えようとする〈私〉とのズレがなくてはならないはずである。

しかも、ここで重要なのは、後者の、乗り越えてゆく〈私〉のみが唯一本物の〈私〉なのではない、という点である。そうではなくて、あくまでこの両方のズレを含んだ〈私〉が唯一の〈私〉なのであり、その関係そのものが〈私〉なのである。それは、先に〈私〉と〈内なる他者〉との関係において、〈私〉が関係の片方なのではなく、まさに関係そのものが〈私〉であると言われてきたのと同じことである。

つまり、〈私〉が今までの〈私〉を不断に乗り越えてゆくプロセスであるためには、〈私〉は、内にすき間の空いたズレであり、関係でなくてはならないのである。そして、今までの〈私〉を不断に乗り越えてゆくプロセスは、同時に、新しいズレ、即ち新しい差異を不断に〈私〉の内に産みだしてゆく差異化(differentiation)のプロセスでもなければならぬのである。このように〈私〉とは、徹底して差異を含んだ関係なのであって、自ら差異を産みだしつつ、しかも不断にそれを乗り越えようとする新しい〈私〉を投企し続けるようなプロセスの総体として理解されるべきなのである²²⁾。

こうした〈私〉の存在構造を、本稿は、〈私は実体である〉という理解と対比的に、〈私それ自身が関係である〉と表現してきたのである。

そして、こうした〈私それ自身が関係である〉という〈私〉の在り方を基礎にすることによって、はじめて〈私〉は、〈関係において〉と同時に〈プロセスとして〉理解されることになる。つまり、対他的な関係における〈私〉の他者性と、不断に未来へと投企しつづけるプロセスとしての〈私〉の時間性が二つながら、〈私〉の同じ一つの存在構造、即ち〈私それ自身が関係である〉という在り方に基づいていることが示されるのである。

当然、こうした理解は、〈私〉の他者性と時間性をめぐぐる膨大な問題領域の中で検討され直され、そこからより深く基礎づけられてゆくべきであろうが、それは既に本稿の課題を遙かに越えた仕事である。本稿にとっては

むしろ、このように〈私〉を〈関係〉において・プロセスとして理解することによって、〈自己完結的・自己同一的な実体〉という〈私〉理解から解放されることの方が重要だったのである。

〈私〉とは、他者をすべて排除したあとに残る自己完結的な実体なのではなく、まさにそれ自身〈内なる他者〉との関係である。同時に、また〈私〉とは、恒常的な実体、もしくは持続的な状態として自己同一的な在り方をした実体なのではなく、まさに〈私〉の内に不断に差異を産み出しつづけ、またそれを乗り越えようと新しい〈私〉を投企しつづけるプロセスなのである。

ワロンの〈内なる他者〉を手掛りにすることによって、本稿は、〈私は実体である〉という理解に対するアンチテーゼを、〈私それ自身が関係である〉という形で定式化したのである。

(指導教官 堀尾輝久教授)

注

- 1) 拙稿「《自己同一性》再考——自己の解体と再編成のために——」(日本教育学会、現代社会における発達と教育研究委員会編『研究報告集、第四集』1986年)。
- 2) 本稿のこうした課題は、〈実体論的理解〉対〈関係論的理解〉の構図において、後者に与みする議論を進めることとも言いかえられよう。しかし、実はこうした対立構図の先に〈もの〉対〈こと〉という構図も存在する。既に、廣松渉氏の立論、「事の原基性と物象化的錯誤」という構図があり、また、木村敏氏の「自分が自分であること」を存在論的に問う構図がある。本稿は、そうした〈こと〉的理解から多くの示唆を受けつつも、しかし〈こと〉へと高飛びすることなく、あくまで〈関係の第一次性〉に定位するものである。
- 3) 本稿は、前稿「《自己同一性》再考」の註20において課題として残しておいた作業を独立した形で論じ直したものである。
- 4) “Le rôle de «l'autre» dans la conscience du «moi»” 1946 (Enfance Numéro Spécial 1.2 Janvier-April, 1968 pp. 279-286)
“Niveaux et fluctuations du moi” 1956 (Enfance Numéro Spécial 3,4 Mai-October 1959 pp. 87-97).
以下、本文では、前者を「'46年論文」、後者を「'56年論文」と略記し、引用に際しては原論文ページ数と、邦訳書の頁数とを並記した。邦訳は浜田寿美男他訳『ワロン・身体・自我・社会』1983 ミネルヴァ所収『『自我』意識のなかで『他者』はどういう役割をはたしているか』・「自我の水準とその変動」。尚、訳文等については適宜変更させていただいた。
- 5) この二本に限定したのは、〈内なる他者〉を扱った論文が、私見によるかぎり、他に見あたらないためである。従って、ワロン研究という観点からは、本稿はかなり狭い限定を持つものである。ワロンの〈私 Moi〉論と、その生理心理学的論考とのつながりは、ワロン研究の大きな課題であるだろう。
尚、R. ザゾも「アンリ、ワロンの心理学における他者の問題」と題した論考で、同じ二本の論文に限定しながら、

ワロンの Moi について検討している。R. Zazzo “Psychologie et Marxisme La vie et l'œuvre d'Henri Weil” (Denoël/Gonthier 1975) Ch. III 波多野・真田訳『心理学とマルクス主義』(大月書店 1978)。

- 6) 〈自我〉や〈自己〉は、日常語において、第一人称代名詞としては使われないのに対して、〈私〉は、端的に一人称の機能を持つ。従って、〈自我・自己〉と、〈私・僕・俺〉とは、異なったカテゴリーに属する用語ということになる。さらに、E. バンヴェニストによれば、そうした一人称代名詞は、三人称代名詞のように客観的な対象領域を指示することがなく、語る主体 (sujet parlant) が具体的な状況の中で用いることによって、はじめて意味を受けとることができる。(E. バンヴェニスト「代名詞の本性」『一般言語学の諸問題』(みすず)所収。)とりわけ、日本語のように自称詞が多様であり、社会的状況から直接に影響を受ける場合には、〈私〉と〈俺〉や〈あたし〉とではその意味内容が全く異なってくる。本稿は、最終的には、まさにそうした状況によって左右されてしまう、生きた〈一人称〉の〈私〉に迫ることをめざすが故に、Moi を、〈自我〉ではなく〈私〉と読み込むのである。
尚、ワロン自身の用語法としては、Moi と Je の区別は見られない。幼児の一人称習得について語る時にも、le Mien (私のもの) や, Il (三人称) からは区別しつつも、Je と Moi の区別には言及せず、「Je や Moi の使用」('56年論文 p. 87 24頁) という仕方で一括して用いている。仮に、この Moi と Je を区別するならば、一人称習得の過程において Moi が先行し、Je が遅れるという点は何を意味するのか、また、G.H. ミードらのいう Me と I の区別とはどう重なるのか等々、新たな問題を抱え込むことになる。
- 7) op. cit. R. Zazzo “Psychologie et Marxisme” P. 60 邦訳 72頁。
- 8) 当然 “Les origines du caractère chez l'enfant” (『幼児における性格の起源』) など、ワロンの発達論的研究においては、暗喩における「星雲」が、母親との「情緒的共生 (symbiose affective)」として語られ、その「主観的癒合 syncretism subjectif」が論じられ、また自我の成立は、「自己受容感覚 sensibilite proprioceptive」や「情動」の問題との関連で、三才頃までのプロセスとして徹底して検討されているわけである。
- 9) この socius 概念を、ワロンは、P. Janet から借り、ジャネは、J. M. Boldwin から継承しているという。同様に、我国の教育哲学者篠原助市が論文「教育の根本原理としての弁証法」(『批判的教育学の問題』明治図書 1970 所収)において、このホルドウィンの発達理論を基礎にその論を展開していることなどを思い起こすならば、発達研究の歴史におけるボールドウィンの重要性は、あらためて丹念に掘り起こされる必要があると思われる。
- 10) この「記述の視点」については、「ヘーゲルの手法を改作しつつ」提出された廣松氏の立論に負うている。廣松渉「関係の成立——自他関係の形成——」『新岩波講座哲学 4』(1986 岩波書店) 328頁。
- 11) 同じことを、浜田氏は次のようにたくみに表現している。「自他二重性 (つまり他者とともにあるという人間の本源のあり方) は、自我二重性 (つまり自我の本質たる対話的二重構造) と相即する。」「『自我形成論 ⑨』『発達 26号』(ミネルヴァ 1986) 114頁。
尚、この連載「自我形成論 ①~⑨」は、自我論と自我形成論とを同時に練り直したきわめて興味深い研究報告である。
- 12) 本文中、〈ズレ〉、〈対〉、〈二重性〉と言い換えられる〈私〉

と〈内なる他者〉との内なる関係は、G. ドルルーズにならうならば、「内的差異 difference interne」と表現することができよう。即ちそれは、二つの別々の実体としての〈私〉と〈内なる他者〉との間にある相互外在的な差異、つまり他者性や否定性ではなくて、むしろ、その〈私〉それ自身を構成する差異、つまり内的差異なのである。「内的差異は、矛盾や他者性、否定性にまでは行かず、また行くべきではない」、むしろ「これら三つの観念は、内的差異という考えほどには深いものではなく、内的差異についてただ外部からとられた見方である。」(G. Deleuze “La conception de la différence chez Bergson” Les études bergsoniennes Vol. IV, 1956, P. 90. 平井啓之訳『現代思想 4-8』1976) ベルグソン哲学を差異の問題として理解し直したこのドルルーズの論文は、〈実体〉に対するアンチラーゼとしての〈関係〉概念を、「持続」の本質にかかわる Différenciation (差異化, 分化), つまり〈自己との間に差異を生じつづける〉ということから捉え直させる重要なものである。

- 13) 前掲書『身体・自我・社会』114頁。
- 14) 同上書, 116-117頁。
- 15) これと同じ問題は、G.H. Mead の理論枠組〈Me-I〉と〈Self〉の関係についても指摘されうる。即ち、〈Self〉を見落ししながら、Me を客我と、I を主我と訳し、それによって、その I の方をひといきに究極の「主体—自己」と理解してしまうという点である。むしろ、〈Me と I〉のズレにこそ留まるべきであって、そのズレを含んだ〈Self〉の方こそが自己として注目されるべきなのである。小林敏明「自己の解体と役割行為——A. クラウス精神病理学方法論の批判的再検討を通して——」(『思想』1985, 10月号, 所収)の指摘である。
- 16) 木村 敏『自己・あいだ・時間』(弘文堂, 昭和59年) 162頁参照。
- 17) 同上書 165頁。ここで木村氏が依拠しているのは、ドルルーズの論考「差異化の運動としてのエラン=ヴィタル」(宇波 彰訳『ベルグソンの哲学』法政大学出版, 1974, 第五章)である。
尚、木村氏の自己論は、すべて独立した形で検討するに値するが、とりわけ次のものは貴重である。「存在論的差異と精神病」(『自分ということ』レグルス文庫, 1983, 所収), 「時間と自己・差異と同一性」, 「精神医学と現象学」(『自己・あいだ・分裂病』(共に前掲書『自己・あいだ・時間』所収))。
- 18) 木村氏は、こうした「自己」と「自己ならざるもの」とのあいだにおける非対称的で一方的な「自己」の在り方にこそ、「自己の主体性」の根拠を見、同様にまた、そこにこそ「自己の独自性・同一性」の根拠を求めている。そこで、逆に「自分と他人の区別がなくなった」といった体験も、そうした自己の一方的な関係のバランスが崩れたこととして説明する。ワロンが、〈私〉と〈内なる他者〉との力動関係を強調するとしても ('56, P. 94, 43頁), それはこうした〈私〉の内なるバランス関係として理解すべきであろうと思われる。
- 19) ワロン読解という観点から、こうした読み込みはあまりに存在論的に偏っており、それは発達心理学者ワロンの真意ではないのではないかと、という反論が当然予想されうる。しかし、本稿が課題とした二本の論文は、存在論的に読まれてはならないどころか、むしろ全く逆に、まさに存在論的にこそ読まれなくてはならないのである。
重要なのは、ワロンがそこで論じていたことが、〈私〉の機能とか内容の発達ではなくて、そもそもこの〈私〉ということが未だ成立せざる状態に遡りながら、まさに〈私〉

が〈私〉として成り立ってくるプロセスであったという点である。従って、そこでは、〈私〉が在るということそれ自体が自明の前提ではなくており、むしろ、〈私〉はいかに在るようになるのか、〈私〉はいかに在るのか、という、まさしく存在論的な問いこそが、そこで問われていたのである。本稿の課題は、そうした問いに答えること、正確にはワロンに即しつつ、その先まで進んで答えを定式化してみることなのである。

- 20) ここで、本来ならば独立した節を設けるはずであったにもかかわらず、紙幅の制限によって割愛せざるをえなかった点についてふれておこう。それは、鏡像問題をめぐってメルロ・ポンティからだされたワロン批判についてである。“Les relations avec autrui chez l'enfant” (Les cours de Sorbonne Centre de documentation universitaire 1962)「幼児の対人関係」滝浦・木田訳『眼と精神』(みすず 1966)。この「幼児の対人関係」は、1950-51年度パリ大学児童心理学の講義録であるから、少なくともワロンの'46年論文は読みえたはずであるにもかかわらず、メルロ・ポンティは一言もそれについて言及せず、もっぱら『幼児における性格の起源』にのみ依拠しながら次の点について批判を加えている。
まず、ワロンは鏡像の問題を、認識関係の次元で知的発達の問題としてのみ扱っており、存在の次元から、メルロ・ポンティの表現に従えば「〈我々の存在の仕方全体〉の構造変化」から、十分に理解していないという点。さらに、鏡像の正しい理解は、〈内受容的な私〉と区別された〈可視的な私〉を理解し、しかもその時、自らが〈見られる存在〉であり、従って〈私を見る他者〉がいるという他者認識が成立してこそ可能であるにもかかわらず、その点が十分考慮されていないという点である。ところが、こうしたメルロ・ポンティの批判に対して、本稿が課題とした二本の論文は、既に、〈私〉の成立をその存在構造の問題として扱い、しかも〈内なる他者〉という語を用いることによって、独我論的認識主観とは全く異なる。他者との関係の中にある〈私〉を論じながら、独自の解答を示していたわけなのである。
そこで、むしろ〈鏡の中の私〉を〈内なる他者〉と重ねて理解し直す必要があると共に、〈私それ自身が関係である〉という観点から、〈鏡の中の私〉は〈内受容的な私〉の疎外態なのではなく、むしろ両者のズレにこそ、〈私〉の在り方を読み込む作業が、課題として残されることになる。
- 21) 〈私それ自身が関係である〉という理解から見る時、実は、〈私〉の在り方を、未来への投企の方向にのみ規定するのは一面的であって、逆の方向も考えられねばならない。この点について、木村氏は、M. ハイデガーの「存在論的差異」の実現としての〈超越〉と、J. デリダの、(結果としての différence にまだ至りつかない進行中の、現在分詞形の跡をとどめた)〈différance〉とを、対比させつつ、同じ事態を逆の方向から捉えたものである、という興味深い指摘をしている。即ち、「自己自身への到来」や「主体の獲得」ということを、ハイデガーは、「これから成就すべき目標」とみているのに対し、デリダの方は、それを既に成就された「結果」として、それへの遅れを différance と表現している、というのである。木村 敏『直接性の病理』(弘文堂, 1985) 13-15頁。
- 22) こうした理解は、ハイデガー以来の〈実存〉理解にならうならば、〈私〉は常に、自分自身ではないという仕方では存在し、いつも既に自分を超越出ているという脱自的構造において存在する、ということになる。尚、こうした理解の基礎になる “Sein und Zeit” (『存在と時間』)における Dasein (現存在)の自己については、未発表ながら、拙稿「現存在の〈自己認識〉」(東京都立大学大学院修士論文 1982年度哲学研究室提出)で論じたことがある。